

〔書 評〕

Gerald Delanty, *Community*, 2nd edition,
Routledge 2010

土 居 充 夫

評者は、2010年春、『「第3の道」序説』（晃洋書房）を出版した。「自律」と「共生」の可能な社会をめざした知的営為の第一歩であった。その後、研究を進める中で、たまたま出くわしたのが本書であった。（初版は2003年に出版されており、2006年に、NTT出版から、山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティ：グローバル化と社会理論の変容』として邦訳されている。）著者のジェラード・デランティは、英国のサセックス大学教授で、社会学、社会思想、政治思想を専門としている。評者は、シチズンシップ研究の基本文献である、“*Handbook of Citizenship Studies*” (edited by Isin E. F. & Turner B., Sage 2002) 所収の論文を読んで、Delantyを高く評価していたので、本書を期待しながら、読み進めた。その結果、期待は裏切られることはなかった。本書の特徴と本書から学べることをいくつか記せば、以下のようになる。

第1に、本書は、コミュニティ概念の歴史的な展開をフォローした上で（第1章、第2章）、現代的諸条件から生じるきわめて多様な現代のコミュニティ論に目配りをしている（第3章～第9章）。著者の力量に感心するとともに、本書が入門書として最適と感じる次第である。ちなみに、扱われている現代のコミュニティ論とは、都市社会学（第3章）、コミュニティリアニズム（第4章）、多文化主義（第5章）、コミュニケーション・コミュニティ（第6章）、ポストモダン・コミュニティ（第7章）、コスモポリタン・コミュニティ（第8章）、ヴァーチャル・コミュニティ（第9章）である。

第2に、広範な研究から、コミュニティの本質が浮き彫りにされる。コミュニティの本質とは、何らかの集団に所属する人々の情緒的な人間関係である。すなわち、人が集団に所属しているという安心感をもっている、さらに、所属メンバーがお互いに気遣い合っていて、孤独でないという安心感をもっている、そんなときに、コミュニティは存在しているのである。地域性は、一般に想像されるのとは異なり、本質的なものではない。それは次の2つの意味でそう言える。①コミュニティ概念には2つの淵源がある。一つは、古代ギリシアのポリスにおける、直接的な社会関係であり、そこでは、地域性、特殊性が含意されている。もう一つは、キリスト教において理想とされる、全人類が参加する普遍的コミュニティであり、そこでは、普遍性こそが含意されている。②今日の、ICTの発達、グローバル化等によって、地域を超えた人間関係が急速に拡大している。

第3に、問題は解決されたわけではなく、むしろ問題の深刻さが明確になった感がある。

つまり、コミュニティの本質を情緒的人間関係と捉えたと、今日のコミュニティ論議の隆盛は、現代人が連帯と所属の問題に対して強い不安感をもっていること、換言すれば、強烈な孤独感に苛まれていることを示すものである。著者は、地域性に捉われないコミュニティの形成（＝コミュニケーション・コミュニティ）を現代の特徴と把握して、一方において、肯定的に評価しているが、他方において、疑問を隠さない。地域における、あるいは日常生活世界における情緒的な人間関係を築くことなく、現代人は、コミュニケーション・コミュニティだけで、その強い不安感・孤独感を解消できるのだろうか、と。

第4に、コミュニタリアニズム論が、興味深かった。著者は、まずコミュニタリアニズムを次の4つのタイプに分けて紹介する。

- ①自由主義的コミュニタリアニズム（liberal communitarianism）は、コミュニティに留意しないJ. ロールズ流の自由主義に修正を加えたもので、政治的コミュニティは、それに先だって存在する文化的コミュニティに依存しなくてはならないと主張する。この立場は、多数派の文化の承認に焦点を当てている。（代表的論者に、M. サンドル、C. テイラー、M. ウォルツァー、A. マッキンタイアがいる。）
- ②ラジカルな多元主義（radical pluralism）は、自由主義的コミュニタリアニズムとは逆に、マージナル集団（女性など）のエンパワーメントに関心がある。この立場は、純粋な多文化社会の形成を目指すものである。（代表的論者に、M. I. ヤングがいる。）
- ③市民的共和主義（civic republicanism）は、社会資本と公的生活への参加をコミュニティの中心的なものとする。特徴として、かつての自由主義のプロテスタントの価値を良しとする、保守的な傾向を示すことや、資本主義や労働の性格の変化によって引き起こされた問題に対し、コミュニティを解決策として提示することが挙げられる。（代表的論者に、H. アレント、R. パットナム、R. ベラーがいる。）
- ④統治的コミュニタリアニズム（governmental communitarianism）は、「第三の道」が採っている立場であって、コミュニティを統治の一手段として見る。したがって、それは、政府による社会的コントロールの行使であるが、コミュニティをエンパワーする可能性もある。通学・家族・治安維持に関心があり、近隣・地域・家族・団体から成る小さなコミュニティの回復を主張する点で、A. エチオーニの思想は、これに近い。

このように紹介をした後、著者は、ラジカルな多元主義を除いて、コミュニティが同質的なものとして捉えられている点で、現実と合っていないと批判する。著者は、コミュニティは、コミュニケーションを通して形成されるが、常に生成途上にあり完成することはないとする、コミュニケーション・コミュニティに与しているようであって、そう考えると、統治的コミュニタリアニズムの二面性が注目されるのである。つまり、地理的に近接して異質な人々が住んでおり、かれらの間の不断のコミュニケーションによって、コミュニティが生成される、そんなダイナミックな過程を促進する政策を、「第三の道」論者は採るべきなのである。

第5に、評者のぶつかっている壁に対して、コミュニティと個人主義の関係を論じた部

分が、示唆を与えてくれるかもしれない。著者によれば、コミュニタリアニズムは、コミュニティと個人主義が対抗するものと捉え、個人主義が広がったために、コミュニティが衰退したと見る。他方で著者は、「新しい社会運動」の研究者に依拠して、個人主義がかなりのコミュニティ活動の基礎にあることも認めている。そこで、「個人主義」論の整理が必要と考えた著者は、リストが完璧なものでないことを認めつつ、次の6タイプに分類する。

- ①道徳的個人主義 (moral individualism) においては、個人は、社会が存在する前に存在しており、自律した、合理的な行為者である。これは、市場社会に適合した個人主義であり、経済秩序における個人を想定している点に特徴がある。
- ②集合的個人主義 (collective individualism) においては、自己は倫理的共同体に根ざしている、あるいは個人は集合的自己 (collective self) に根ざしている、とされる。そこでは、個人が所属する文化的共同体の価値がまず存在し、個人の価値は、そこから発生すると理解される。(代表的論者として、C. テイラー。)
- ③W. ジェームズなどプラグマティスト、あるいはG. H. ミードらによれば、自己の自律性は、他者との間主観的な関係の中で達成される。個人は、集合的個人主義の場合と異なり、文化的共同体によって、その自律を原理的に制約されているわけではない。(他に、A. ホネット。)
- ④表現的個人主義 (expressivist individualism) は、個人をダイナミックで創造的と捉える。この立場は、私的な価値を強調し、集合的、公的な価値を拒否する。その点で、反政治的個人主義 (antipolitical individualism) である。
- ⑤A. ギデンズやU. ベックは、個人化 (individuation) すなわち、再帰的近代化の時代にあって、自分の選択で人生を形成していくことを人は余儀なくされることに注目する。道徳的個人主義が経済秩序における個人を念頭に置いているのに対し、ここでは、人生の全側面における自律＝選択による形成が強調される。(他に、Z. バウマン。)
- ⑥パーソナリズム (personalism) においては、個人化論者よりも、個人の社会性が強調される。自己は、コミュニティへの参加によって形成され、集合善への信念によって維持される。政治参加の意義を強調する点で、パーソナリズムは、表現的個人主義の対極に位置する。(代表的論者として、A. メルッチ。)

この分類に従うと、評者は、⑤のタイプの個人主義の立場から研究を進め、壁にぶつかっていることになる。(少し言葉を足すと、評者にとって、自律の理論化は比較的容易であるが、共生との両立をうまく理論化できず、苦しんでいるのである。) それなら、他のタイプの個人主義を研究することによって打開の道が開けるかもしれない。本書はそんな期待を抱かせてくれるのである。